

(1) 神権行使の利得と犠牲

競争的国家間の国家的利益の追求は、関係諸国民に対して損害と難渋の純生産をもたらす。国家の全利得は、費用より少ない。有形的損得のことでは、利得があったとしても、個人的には、それは扶持階級の利得となり、普通人は、負担という損失のみである。無形的な嫉妬や威厳の問題では国家間のことだけである。

(2) 平和の意味

平和とは、個人間も国家間も同じく「生きつ生かしつ」の意味であるし、「デモクラシーによって安全にされた世界」である。さらに国家間の憎悪や差別扱いの廃棄、国際的に相容れない国家覇気の廃棄であり、国民自決や、国家の保全のための利益の要求の廃棄へと通じる。戦争と平和についての考察はむづかしい。

(3) 戦前状態への復帰

戦時においては、既得利権者に妥協を求めて、産業の産出高を高める必要に政府は迫られる。が、戦後は、いつも通りのビジネスは、18世紀から伝わった諸原理に照らして、解釈された生きつ生かしつの掟の下では、とがめられることもなく進行していくが、「もっと大変なことになっては」とこの国の人々は我慢している。新制産業のもとにおける生きつ生かしつ掟は、戦前の生きつ生かしつの掟とは異なったものになっているにもかかわらず、戦前のいつも通りのビジネスが通っている。

(4) 国境の意義

昔気質の紳士達は相変わらず、国際紛争のもとになる国家的覇気や差別扱いを尊重し、生きつ生かしつの掟の現実的作用の変化の必要には目をつぶっている。産業の新秩序が、国境や国家間の嫉妬に関係なく広く自由な産業上貿易を求めているにもかかわらずである。このことから考えると、治国のための国境は相互の妨害と不信のためのものとさえなる。

関税の壁のない自由な交通の特権をもつ社会に新たに境界線をひくことの問題がある。にもかかわらず、昔気質の紳士達は、平和会議において皮肉にも境界線が起こす相互的不信と破滅の道具だてを守ろうとしている。なぜにそうなるのか。それは、既得利権者達の目的がそこにあるからである。

(5) 昔気質の紳士達

平和会議において、「生きつ生かしつ」の掟を破ろうとしている多くの民族のなかには、この掟のなかで平和にやっている国もある。ウェールズ人やスコットランド

人である。しかし、これも穏健着実な昔気質の紳士達が、この民族を管理するについて、今や旧秩序の掠奪的帝国主義ではないが、これと軌道上にある代用帝国主義によっている。

(6) 新計画の国家

新計画の国家もまた穏健着実な昔気質の紳士達によるのであれば、新味はない。戦争と政治の情勢は、これらの紳士に把えられており、新しいバルカン国家以外のものは想像できない。

(7) 希望の巡礼者

フィンランドや帝政ロシア領の諸断片が、それ自身の歩みをはじめ独立を目ざし、新しく生まれいでて天衣無縫に新しい道を歩もうとする人々。昔気質の紳士達はこのことが、所有権侵害に至るかもしれないことを心配している。しかし、一般的には、この巡礼者達は、昔気質の紳士達の手のうちにある、一部の例外を除いて。

(8) 小マキャベリ組の群

バルカン諸国の国民は、それぞれの民族の習慣や伝統の力を頼りに一人前の自立国家となることを目ざし、政治家達の遠見深慮の献策の存在の一方、必ずしも普通人の得にならない国家施設を要求し、しのぎを削っている。

(9) 生きつ生かしつの掟

国家的政府がなければ、又は国境がないならば、平和は保たれる。軍備は、平和の保持には役に立たないが、バルカン型新国家の計画には、軍備が当然のこととされ、国家の自決自助に不可欠のものとされている。又、外国貿易や投資の領域にあっての国家的覇気や海外における有利な企業を助長し、保護することは、平和の保持とは矛盾する。

新制産業における生きつ生かしつの掟からすれば、既得利権者を有利にするさまざまの献策は、すでに時代遅れである。“ 覆面的治国道の巨人達 ” とは、具体的には何なのか。

(10) 民族

独立を望む国民は、ひとつの民族である。それが国家を成した場合の効用は、隣国目的とは喰い違ってくる。民族はひとつの文化的集団であって、その集団のままで、強いて国家を成そうとしないこともある。

(11) 愛蘭人 アイルランド人

アイルランドの特殊性について

(12) 弱小国家の自決権

独立を果たしていない弱小民族にとっての国家の自決と保全は、希求されるべきであるが、普通人にとっては、必ずしも最良のこととも云えない、国家施設の負担、物質的生活条件に関して。ルーマニヤは、国家の形をとっているが、従属的弱小民族のアイルランド人より、その普通人の生活の物資条件は劣る。この点に関してなら、日本は更に劣る。

(13) スカンジナビア諸国

国家自決の実質的価値について

スウェーデン、デンマーク、ノルウェーの順で自決的である。三番目のノルウェーが、普通人の物質的生活条件は最も良好であって、スウェーデンはこの三者の中で最も劣る。

スカンジナビア人は、帝国主義的でなく生きつ生かしつの掟に従っているが、国内的にはあらゆる国家的覇気の負担を負っている。

(14) 国家的施設の教訓

国家施設として存在する軍備、保護関税、領事事務、外交事務これらは、比較的自由的公正なこのであっても問題が残る。生きつ生かしつの掟に近づきつつも、競争的自助の観念を重んじるのである。そしてそれらの国家行政は、やはり下積みの社会の犠牲のうえでの既得利権者が若干の利益を得るだけである。

(15) 国家保全の弁

国家施設の性格からくるむだづかい、やさまたげは普通人には、困難を与え、民族のためとするはずの国家の目的と違って特殊利益者のための作業をはからずもしてしまう。このサボタージュ行動は補償的效果をもたらす。

国家施設の浪費とサボタージュ行動は、むしろ必要なものでもある。このことは、この種的手段によらなくとも、代わりがあり、その代わりの限度内の経済活動だからである。国家保全のために、何かにかかと、弁じてよいことがある。

(16) 下積みの社会と和の為からみて

権勢への覇気や帝国主義的野心のない国家施設はそれらをしっかり持っている国に比べてより経済的であり平和である。国家保全や国家自決は、それが虚構に近づけば近づくほど国内においても隣国との関係においても生きつ生かしつの掟にそっている国家施設の無言の磨滅は、最も祝福すべきものである。

(17) 階級的利害の間隙

下積みの社会の物質的狀態や、平和の保持のためには、国家施設は少なれば少ないほどよいのであるが、すべての人やすべての階級の利害は異なる。諸国家の内部的構成はますます異なっており、産業と実業の間には、明白な利害関係があり、そこでの普通人と既得利権者の利害の対立も複雑である。国家施設と、それによる統制とは、それらが及ぼす普通人への価値と既得利権への価値とを異なって支配する。

(18) 産業社会と実業社会

産業においては、国家的差別扱いや国家的覇気もうけ入れる余地はなく、それらに打ち勝つことが、日々の作業の一部である。実業企業では、国内でも国外でも有能な国家施設を必要とし、それらの存在は、実業の経営にとって無限の価値がある。

(19) 事実本位的な改造案

有形的働程である産業を重んじようとするならば、又は普通人の利得を考えていこうとするならば、商業や投資上の既得利権者にはすべての価値が無くなるだろう。

(20) ボルシェヴィズムの脅威

このような改造がなされるならば、昔気質的政治家たちや扶持階級や財界の頭目達にとっては恐怖である。具体的には所有権の転覆となる。